

第9回

よこはま 地域福祉フォーラム

報告書

一人ひとりが
大切にされるまちへ

🕊️ 思いに寄り添い 認めあい 支えあう 🕊️



社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会
市内18区社会福祉協議会



ほら、
よこはまは
あったかい

はじめに

令和6年12月5日に開催いたしました「第9回よこはま地域福祉フォーラム」は、コロナ禍以降5年ぶりに、すべての制限なく「どなたでもお越しください」と御案内させていただくことができました。

地区社会福祉協議会、民生委員・児童委員、自治会・町内会など地域の皆様や、地域ケアプラザ・区役所など関係機関の皆様を始め、フォーラムの内容に御関心のある多くの方々に御来場をいただき、心より感謝申し上げます。

コロナ禍を経て、人々のワークスタイルやライフスタイルは大きく変化しました。社会福祉の分野においても、従来の制度や仕組みだけではままたまらないさまざまな課題が顕在化し、地域での活動や取組に難しさを感じる状況がありました。

そのような中であっても、地域では、日々の「お互いさま」という近所づきあいや絆の中で、お困りごとを助けるだけでなく、「その人らしい暮らしや思いに寄り添った活動」や「さまざまな主体が連携して支えあう活動」が行われてきました。

そこで、今回のフォーラムテーマは「一人ひとりが大切にされるまちへ～思いに寄り添い 認めあい 支えあう～」といたしました。

基調講演の前半では、おれんじドア代表の丹野 智文様に、若年性認知症当事者の立場から御講演をいただき、後半は、宇都宮短期大学の宮脇 文恵教授とお二人でお話いただきました。「御本人のお話に心を動かされた」「自分達の活動を改めて見つめなおす機会となった」といった多くの気づきや共感のメッセージが寄せられました。

分科会では、コーディネーターの永田 祐様、渡辺 裕一様、そして地域の皆様、関係機関の皆様に御登壇いただき、横浜で行われている身近な地域の支えあいの取組を共有しながら、活発な意見交換が行われました。

おかげさまで、のべ800名以上の御参加をいただき、今回も大変充実したフォーラムとなりました。また、2月からの録画配信にも、市外県外から多くのお申し込みをいただきました。全国で様々な地域の課題に向き合い、同じ思いで御尽力されている方々を思うと大変勇気づけられます。

本報告書は、当日の基調講演と分科会の内容をまとめたものです。横浜の身近な地域のつながり・支えあいの取組が、日々地域活動に携わっている皆様のヒントとなり、その活動を一層充実させる一助となれば幸いです。

横浜はもとより、日本各地の地域福祉に携わる皆様様が、これからも生き生きと御活躍されることを切に願います。

令和7年3月

社会福祉法人横浜市社会福祉協議会
会長 石内 亮



●はじめに1

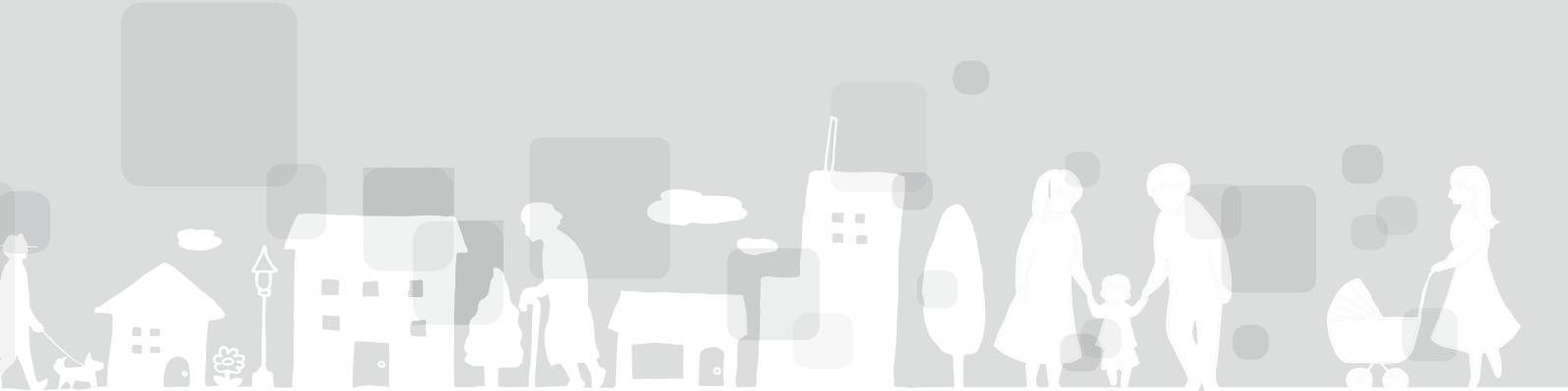
●写真で見る“よこはま地域福祉フォーラム”4

●基調講演6

つながりの中であたりまえに生きていく
おれんじドア 代表
丹野 智文 氏

コーディネーター：宇都宮短期大学 人間福祉学科 教授
宮脇 文恵 氏

●分科会概要 12



◆分科会1 14

寄り添い認めあい自分らしさが輝くまちへ

コーディネーター：同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授

永田 祐 氏

- (1) 【瀬谷区】 宮上会（宮沢地区町内会）
キャラバンメイト（宮沢地区民生委員）
二ツ橋地域ケアプラザ
瀬谷区社会福祉協議会
- (2) 【都筑区】 都田地区平台町内会
都田地区民生委員児童委員協議会
都田地区社会福祉協議会
都田地域ケアプラザ
都筑区社会福祉協議会

◆分科会2 21

みんなが主役！ つながり 広がる まちづくり

コーディネーター：武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授

渡辺 裕一 氏

- (1) 【戸塚区】 東戸塚地区ハートプラン推進委員会
東戸塚地域ケアプラザ
戸塚区社会福祉協議会
- (2) 【磯子区】 第一生命保険株式会社 横浜総合支社
新杉田地域ケアプラザ
磯子区社会福祉協議会



よこはま 地域福祉フォーラム

2024 (令和6) 年 12月5日

一人ひとりが大切にされるまちへ

～思いに寄り添い 認めあい 支えあう～

開会



石内会長の主催者挨拶

令和7年2月3日(月)

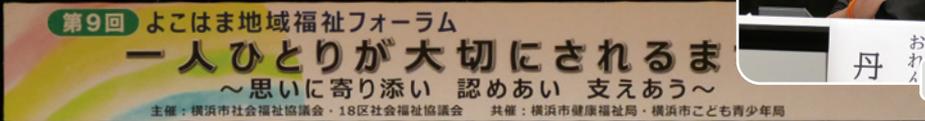
～3月26日(水)

動画配信



おれんじドア
丹野 智文氏
講師の丹野智文氏

基調講演



おれんじドア 代表

6～11 ページ

丹野 智文 氏による基調講演

「つながりの中で
あたりまえに生きていく」



コーディネーターの宮脇文恵氏

分科会
1

関内ホール(大ホール)

寄り添い 認めあい 自分らしさが輝くまちへ

コーディネーターの永田 祐氏



14 ~ 20 ページ

- “認知症について” 地域みんなで考えよう
～学びから変わる地域の穏やかなつながり～ (瀬谷区)
- 地域の **みまもり** **やさしさ** **こりつさせない取組**
～買い物支援にとどまらない移動販売～ (都筑区)

分科会
2

関内ホール(小ホール)

みんなが主役！ つながり 広がる まちづくり

コーディネーターの渡辺 裕一氏



21 ~ 28 ページ

- 認知症やさしいまなざし
あったかハート in 東戸塚 (戸塚区)
- ゆるやかな見守り「いそまる」
～企業と地域がつながる仕組み～ (磯子区)

つながりの中で あたりまえに生きていく

おれんじドア 代表 丹野 智文氏



基調講演の流れ

- (1) 基調講演「つながりの中で あたりまえに生きていく」
- (2) 質疑応答
- (3) まとめ

内 容

基調講演では、おれんじドア代表の丹野 智文様より「つながりの中で あたりまえに生きていく」をテーマにご講演いただき、若年性認知症当事者としての視点から、ご家族や職場の同僚とのエピソードを交えて、認知症とともに生きるということや、人と人とのつながりの中で生きていく大切さについてお話いただきました。

質疑応答では、コーディネーターに宇都宮短期大学の宮脇 文恵先生をお迎えし、事前に参加者の皆さまからいただいた質問等を通して、病名ではなくその人を見るということや、誰もが安心して認知症になれるまちについて考えました。

最後に、まとめとして宮脇先生より、認知症に限らず、誰もが大切にされるまちづくりについてお話いただきました。

この報告書では、質疑応答とまとめの一部を抜粋して掲載します。

講 師

丹野 智文 氏

おれんじドア 代表

❖2013年アルツハイマー型認知症と診断され、営業職から事務職に異動。現在もネットヨタ仙台に在職しながら講演など社会的理解を広める活動をしている。9年前、認知症当事者のための物忘れ総合相談窓口「おれんじドア」を開設。

著書に「丹野智文 笑顔で生きる」「認知症の私から見える社会」ほか。

コーディネーター

宮脇 文恵 氏

宇都宮短期大学 人間福祉学科 教授

❖東京学芸大学教育学部卒業、日本社会事業大学大学院博士前期課程修了。現在、宇都宮短期大学人間福祉学科教授。専門は福祉教育論、地域福祉論。



質疑応答

おれんじドア 代表 **丹野 智文氏**

宇都宮短期大学 人間福祉学科 教授 **宮脇 文恵氏**

【Q1】

宮脇 今からの時間は、会場の皆さんがお聞きになりたいであろうことを、私から丹野さんに質問させていただきます。よくご近所を歩いていて、「もしかして認知症かな？」と思う方と出会うことがあります。どのように関わったらいいと思われませんか？

丹野 「認知症の人」と考えるのではなく、普通に関わればいいと思います。

近所のおばあちゃんなら普通に「おはよう、寒いね」と言って関係性をつくれればいいと思います。そのうえで「何か困ったことがあったら言ってね」と言う。関係性がない人に「助けて」とは言いづらいですよ。

また、よく「丹野さん、携帯が使えてすごいですね」と言われますが、私は人生の半分以上携帯を使っています。普通、50歳の人に「携帯を使っていますすごいですね」とは言わないですよ。やはり「人ではなく、病名で見られているな」と感じます。

【Q2】

宮脇 本日は認知症の方のご家族もいらっしゃると思うので、毎日の生活の中で、どう接したらいいかについてお話いただけますか。

丹野 私をご家族にお伝えしたいのは、声がけの仕方をちょっと考えてほしいということです。たとえば、私が自分でコーヒーを淹れたことを忘れて、「ママ、コーヒー淹れてくれてありがとう」と言ったら、妻は「いいよ。あなたが自分で淹れたけど」と笑って返答してくれます。それを「何で忘れたの？」という人が多いですよ。骨折した人に「早く走れ」とは言わないのに、認知症の人には「忘れないで」と言う人が多くて不思議です。

あとは、失敗する権利を奪わないでほしい、成功体験で終わらせてほしいこともお伝えしたいです。

ある朝、私はパンを焼いていることを忘れて、真っ黒に焦がしてしまいました。妻に「焦がしてしまったから、焼いてくれないか」と頼んだら、「まだパンあるから、自分で焼けば？」と返されました。そこで今

度は、たかが1、2分ですからずっと見えています。緊張しながらじっと見ていて、無事にパンを取り上げた瞬間、成功体験で終わっているんですよ。

「パンを焦がしました。妻が焼いてくれます」では、失敗体験で終わったままです。そうすると、次に失敗したくないからお願いするしかなくなります。失敗していいと思いませんか。失敗するから工夫をする、工夫をするから成功体験が生まれる。そして本人は自信を取り戻します。

【Q3】

宮脇 続いて、「認知症のご本人が電気を消すのを忘れて、点けっぱなしのときにどう注意したらいいですか」という質問です。

丹野 本当にこの質問も多いですが、簡単なことです。気づいた人が消してあげればいいのです。それも優しさなのに、注意するのがいいと思っている人が多いようです。「ちゃんとやることでその人らしく生きられる」と思っているのかもしれないですが、一番大切なのはストレスフリーですよ。

以前調べたらトイレの電気40ワットを1時間点けっぱなしにしても、電気代はたったの0.8円でした。一般的に、ご主人の髪の毛より奥さんの髪の毛の方が長い家庭が多いですよ。ドライヤーの方がよっぽど電気代がかかるんです。だったら電気の消し忘れくらい許してほしいと思います。(会場笑)

【Q4】

宮脇 丹野さんが認知症になられて11年経っていますが、かけられて安心する言葉とはどんなものがありますか？

丹野 私は人の顔の誤認識がありまして、町中で娘だと思って声をかけたら別人だったことが何度かあります。家でも、この顔が娘なのか確信がいつもないのですが、娘の方から「パパ、〇〇だよ」と自分の名前を言ってくれるので、助かっています。

また、道に迷って帰宅が夜遅くなったことがあるのですが、うちの妻は「あ、そう」で終わりました。普通、「あ、そう」では終わらないじゃないですか。不思議に思って「他の当事者は、一回でも失敗すると『もう一人で出かけないで』と言われるのに、どうして私はこうやって自由にしてくれるの？」と聞くと妻は、「心配はするけど、信用しているから」と言いました。こ

の言葉は嬉しかったです。

【Q5】

宮脇 今日会場にいらっしゃっている方は、地域活動をされている方や、施設職員として支援をされている方もいらっしゃると思いますけれども、よい支援者となるにはどんなことが大事だと思いますか。

丹野 自分が認知症になったときに、どう関わってほしいかが大事だと思います。

たとえば認知症カフェに行くと、「折り紙しましょう」「塗り絵しましょう」とよく言われます。「最後に『ふるさと』を歌いましょう」と言われることも多いです。日頃カラオケに行って、唱歌や童謡を歌う人、いらっしゃいますか？ いないですね。ポイントは、「自分が本当にそれをしたいのか」だと思います。

先日、70代のおじいちゃんとカラオケに行ったら、サザンやチャゲアスを歌っていましたよ。それなのに今、デイサービスに行くと「青い山脈」です。「ふるさと」や「青い山脈」が嫌なのではなく、「自分事として考えたらおかしくないですか」と言いたいです。

【Q6】

宮脇 丹野さんが受診されてすぐのときと11年が経った現在では、認知症に対する世間の理解に違いはありますか？

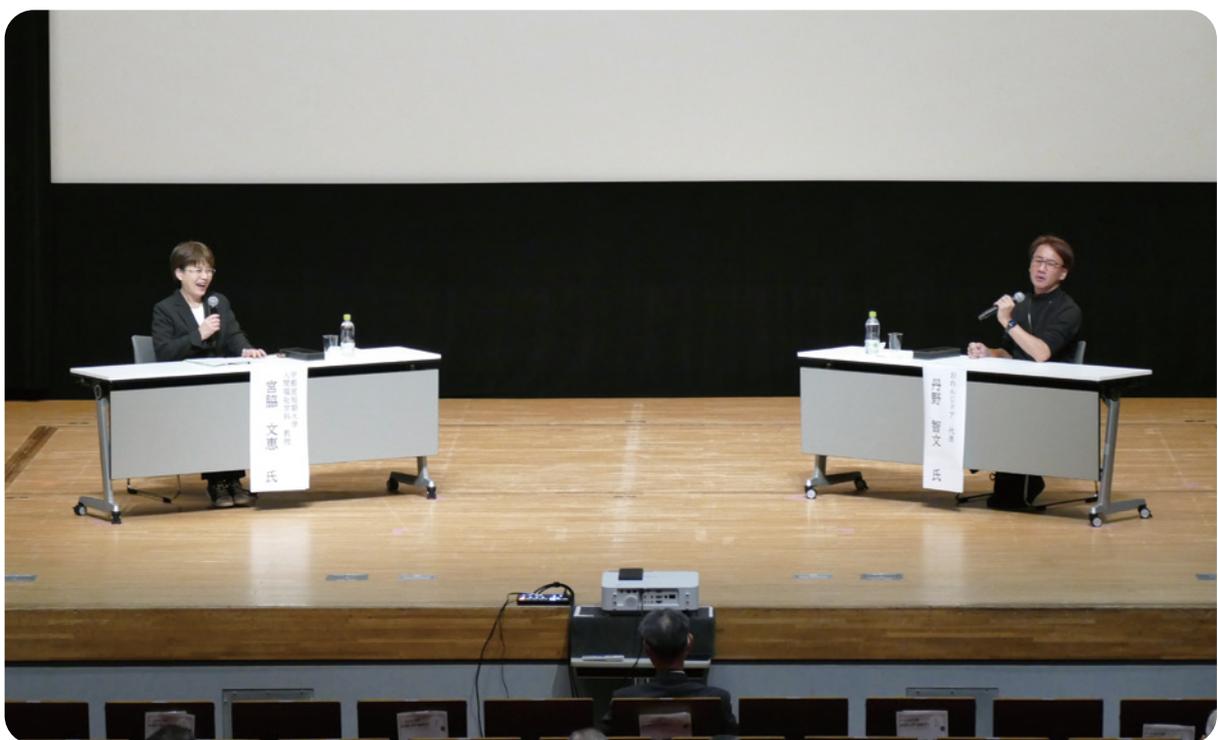
丹野 11年前、私が講演を始めた頃から考えると、まるっきり変わったと思います。第一に、会場に当事者や家族が来るようになりました。11年前は当事者が会場に来ることなんてありませんでした。以前よりも、表に出て顔を出してもいいと思う当事者が増えてきたと思います。

また、最初の頃は「危険だよ。丹野くんに何かあったら、誰が責任取るの?」と言って、県外での講演活動を周りに反対されました。今、私は一人で全国を回っています。今回も一人で来ています。道や電車は間違えし失敗ばかりですけれども、反対方向の電車に乗ったら戻って来ればいだけでしょう。困ってはいないから、周りが認めてくれるようになりました。そこはすごく変わったと思います。

一方で、まだまだ変わらないところもあります。「丹野くんは認知症らしくない」とよく言われるのですが、そう言われる度に、「認知症らしい」とは何なんだろうと思います。まだ認知症という重度のイメージの人たちが多いのだと感じます。

宮脇 確かに、だいぶ時代も進んできたと思います。そうした時代の進化を利用しながら、一緒にやっていたらいいですね。

丹野 これからは本人と家族の間にITが入ることで、



本人も家族もイライラしなくなることも知ってほしいと思います。

実は先日、あるおばあちゃんの家で、グーグルスピーカーを入れました。グーグルスピーカーはスマホと連動して、話しかけると返答してくれます。そのおばあちゃんは「今日はデイサービスの日」「今日は病院の日」としっかり知りたい人で、何度も家族に聞くので「また?」と言われて落ち込んでいました。そこで、そのおばあちゃんの家でグーグルスピーカーを入れて、ケアマネジャーと家族とデイサービスの職員に共有し、予定をすべて入れてもらいました。おばあちゃんが毎日「今日の予定は?」と言うと教えてくれるし、「今日の天気は?」と言っても教えてくれる。「この子は優しいの。何回聞いても怒らないから」と言っていました。(会場笑い)

宮脇 私は7年前に丹野さんと仕事をしたことあるのですが、そのときに「LINEはスタンプが豊富で、字を読まなくても何を言いたいか分かるからLINEを使いましょう」とおっしゃいました。

丹野 LINEスタンプも大切ですし、ぜひ皆さんに使ってほしいのは映像電話機能です。道に迷ったときに、LINEの映像電話で周りにある建物などを見せると、「ああ、ここか」と言って教えてもらえますから。私は本当にそれで助かっています。そういう機能を元氣なうちから使ったほうがいいです。認知症になってから使いましょうといっても難しいですから。

【Q7】

宮脇 先ほど丹野さんは一人で出かけると話していましたが、もしもご本人が一人で出かけて、いなくなったらどうしたらいいですか?

丹野 私は今まで、「徘徊」といわれて行方不明になり、見つかって戻ってきたたくさんの人と話してきました。「何で出て行ったの?」と聞くと、多くの人が「家に居場所がない」「死にたい」と言います。死にたいから、「見つからないように」と思って歩くので、発見しにくくなるのです。

皆さんにいたいのは、「徘徊」が問題なのではなくて、家に居場所を作ってほしいということです。たとえば料理一つとっても、切ることができないのか、煮ることができないのか、味付けができないのかを見てほしいのです。全部できなくなるのは、認知症でも



最後の最後ですよ。それなのに、味付けを失敗するだけで「いいからもう座っていて」と言われたら、居場所がなくなってしまいます。だから家庭内で役割をちゃんと持たせてほしいです。

そしてもう一つ、是非財布を持たせてほしいです。財布を持っていないと、人に聞くとか、助けを求めるとか、タクシーに乗ることを考えつかなくなります。命を守るためにも、財布は持ち続けてもらいたいと思います。

財布については、認知症当事者で集まって話し合ったことがあります。「1000円では足りない」「5000円はなくなったときのショックが大きすぎる」と盛り上がり、結局「3000円を持ち歩きたい」と話がまとまりました。本人たちの意見ですよ。認知症の人も、ちゃんと考えられます。だから、本人と話し合ってください。

あとはやはり、生活の工夫が大切です。家の鍵、財布、保険証などをなくしてしまうなら、カバンと紐でつなげばいいんです。テーブルクロスを模造紙にしたおばあちゃんもいます。テーブルに全部書くとなくさないし、いつでも目に見えるから不安にならないそうです。

ただ、工夫する場合は本人の意思を尊重してほしいと思います。先日、知り合いのおじいちゃんが携帯電話をなくさないように、首からかけるネックストラップを購入しました。黒だと目立たなくて忘れそうだったので、目立つ赤を選びました。本人なりに考えての決断だったのに、家族は「年甲斐もなく赤なんて買ってきて」と怒ったそうです。そういうのは本当によくないと思います。そういうことから関係性が崩れ



かねません。

【Q8】

宮脇 丹野さんの夢はなんですか？

丹野 夢ですか。夢は正直、ないんです。この先どうなるかわからないという気持ちがあって夢はもてないでいます。ただ、今日一日を楽しく過ごしたいと思っています。美味しいものを食べて楽しく過ごしたいと。

美味しいものを食べるのが好きという、「今日の昼は何を食べましたか」とよく聞かれるのですが、私は認知症だから過去のことはすぐに忘れてしまいます。だから、是非「今夜何が食べたいですか？」と未来の、ワクワクすることを聞いてほしいと思います。ワクワクする未来を見て1日ずつやっていけば、いつの間にか10年経っているのではないかなと思っています。

【Q9】

宮脇 認知症は予防と備え、どちらが大切だと思いますか？

丹野 私は認知症の予防はできないと思っています。WHOもそういっていますし、世の中にある予防法については、あまり囚われたいほうがいいと思います。

それより備えが大切です。地震で考えてみてください。地震を予防できると思いますか？できませんよね。でも備えることならできます。

認知症も同じです。今スマートフォンを使っている人は、どんどん使ってほしいです。これが認知症で



困ったときの備えになります。それから人間関係。日頃から友達と関係をつくっていないと、困ったときに誰も助けてくれませんから。今夫婦仲が悪い人は、認知症になったら離婚になりますよ。今一生懸命働いていない人は、認知症になったらクビですよ。(会場笑い)とにかく、今を大切に生きていくことが、認知症になったときの備えになるのだと思います。

【Q10】

宮脇 丹野さんをモデルに作られた映画「オレンジランプ」が上映されてから、嬉しかったことはありますか？

丹野 この映画ができたことをきっかけに、家族と発症初期の本当に大変だった時期のことを改めて話し合うことができました。家族を心配させたくなかったから、当時はなかなか本音が話せませんでした。

【Q11】

宮脇 オレンジランプ、とても良い映画なので、是非皆さんの地元でも上映会をしていただけたらと思います。では最後に、丹野さんから皆さんに一言お願いします。

丹野 「認知症になっても住みやすい町・横浜にしましょう」などよくいわれますが、その一歩先の「誰もが安心して認知症になれる横浜市」というまちづくりをめざしてほしいと思います。

地域共生社会をめざして ～地域に「パートナー」と 「居場所」を増やそう～

宇都宮短期大学人間福祉学科 教授 宮脇 文恵 氏



小児科医であり、東京大学先端科学技術研究センター教授の熊谷 晋一郎先生は、脳性麻痺という障害があり、小さいころから車いすに乗って過ごしてきました。そのため、お母さんが体調不良などで学校に送れないと登校できませんでした。その経験から「頼れる先が1つだと、すぐに道が閉ざされてしまう。複数の頼れる先があることで自立できる」「自立は、依存先を増やすこと。希望は、絶望を分かちあうこと」とおっしゃっています。これは障害のある人だけでなく、高齢者にも、認知症の人にも当てはまると思います。

私たちは誰もが、一人で生きていくことはできません。実は元気な人ほど、いろいろ依存しながら生活しています。フロアを移動するならエレベーターに乗れるし、エスカレーターや階段を使用することもできます。しかし、弱ってしまうと「手伝ってくれる人がいないとエレベーターに乗れない」など、手段がより限られてしまいます。

同じように認知症の人を支えるご家族も、複数の頼れる存在、相談できる存在が必要です。お互いに力を出し合って、地域に理解者や居場所を増やしていきけるように働きかけあいましょう。

地域の皆さんにも、是非積極的に認知症の皆さんとかわっていただきたいです。家族という近い関係では、情が邪魔をすることがあります。しかし地域の人だからこそ見えること、適切にかかわれることがあるからです。その際に、「こうしてあげたい」よりも、まずはご本人の気持ちを聞いて「この人は何をしたいのかな」を優先してほしいと思います。ご本人を抜きにして動かないということが大事になると思います。

また、ご自身だけで頑張るのではなく、地域の中で他の活動者と話し合えると、情報の共有ができたり、

気持ちがあちあえらと思います。地域には頼れる組織もあります。行政・ケアプラザ・社協をそれぞれ積極的に活用してください。

社会福祉施設や事業所の皆さんは、本人が言いたいことを言ってくれる関係をつくり、忙しい日々の業務の中でも、ご本人の声をより多く拾っていくことをめざしていただけるといいと思います。

私たちは、お互いにストレングス（本人の強みや力、可能性）を見出していきたいものです。たとえば本人が認知症になって、さまざまなトラブルが起こったとします。そういった目に見える部分は氷山の一角にしかならず、水に隠れている目に見えない部分にある「自分自身でなんとかしたい」「弱っているところを見られたくない」など、本人なりの事情や理由を想像しながら、全体像を捉えたいものです。

ペットボトルに水が半分入っているときに、「なんだ、半分しかないのか」と思うか、「やった、半分もある」と捉えるのかで、見え方はずいぶんちがいますよね。私たちが人と接するときも、「相手のどんな部分を見れば、いいところが見られるかな」と、捉え方を変えていけるといいのではないのでしょうか。

令和6年12月3日に「認知症基本法に基づく基本計画」が閣議決定されました。それをもとに、都道府県や市町村では認知症の人とともに暮らす計画を立てることになっています。そのときに大事にされているのが「まず、本人に聞いてみる」です。人生は本人のもので、認知症はその人全体からみるとほんの一部です。サポーターではなくパートナーとしてともに関わり合っていけたらいいですね。

分科会 1

寄り添い 認めあい 自分らしさが輝くまちへ

実践報告

(1) “認知症について” 地域みんなで考えよう

～学びから変わる地域の穏やかなつながり～

宮上会(宮沢地区町内会)／
キャラバンメイト(宮沢地区民生委員)／
二ツ橋地域ケアプラザ／
瀬谷区社会福祉協議会 【瀬谷区】

(2) 地域の ④みまもり ⑤やさしさ ⑥りつさせない取組

～買い物支援にとどまらない移動販売～

都田地区平台町内会／
都田地区民生委員児童委員協議会／
都田地区社会福祉協議会／
都田地域ケアプラザ／
都筑区社会福祉協議会 【都筑区】

ねらい

困りごととともに、一人ひとりの「こうありたい」という思いに地域や支援機関が寄り添う、支えあいの取組が育まれています。支える側・支えられる側の垣根なく、つながりの中で誰もが自分らしく暮らすことのできる地域づくりについて考えます。

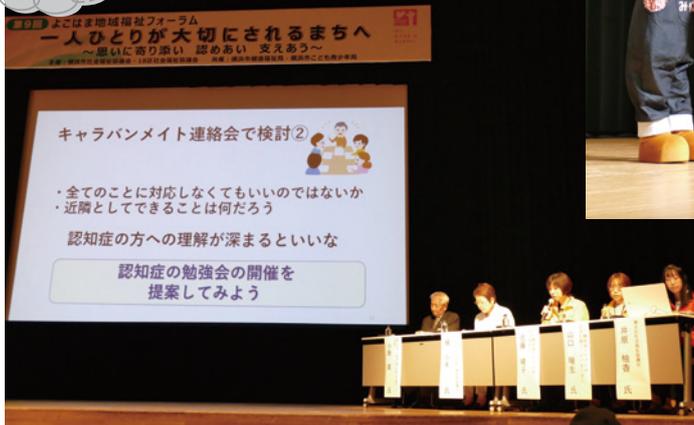
コーディネーター

永田 祐 氏

同志社大学 社会学部
社会福祉学科 教授

❖専門は地域福祉ほか。立教大学、愛知淑徳大学、日本福祉大学の講師等を経て現在に至る。「志」のある実践者同士が出会い、つながり、つくりだす地域でのさまざまな活動やそれを可能にするための仕組みづくり、市町村を中心とした「困っている人」を真ん中においた支援の仕組みづくりについて研究している。
また、社会福祉士として、成年後見など、権利擁護の活動にもかかわっている。

瀬谷区



都筑区





分科会
2

みんなが主役！ つながり 広がる まちづくり

実践報告

(1) 認知症やさしいまなざし あったかハート in 東戸塚
東戸塚地区ハートプラン推進委員会/
東戸塚地域ケアプラザ/
戸塚区社会福祉協議会 【戸塚区】

(2) ゆるやかな見守り「いそまる」
～企業と地域がつながる仕組み～
第一生命保険株式会社 横浜総合支社/
新杉田地域ケアプラザ/
磯子区社会福祉協議会 【磯子区】

ねらい

地域に関わる誰もが地域の一員です。住民、福祉施設、企業などのさまざまな主体が新たにつながり、ともに地域の課題に向き合うことで、まちづくりの可能性が広がります。それぞれの強みを生かした連携のポイントについて共有します。

コーディネーター

渡辺 裕一 氏
武蔵野大学 人間科学部
社会福祉学科 教授

❖ 駒澤大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士(社会学)。東北女子短期大学生生活科講師、健康科学大学健康科学部福祉心理学科准教授、武蔵野大学人間科学部社会福祉学科准教授を経て、平成29年4月より現職。専門は高齢者福祉とソーシャルワーク、ソーシャルワーク教育、地域住民のエンパワメント。

磯子区



戸塚区



寄り添い 認めあい 自分らしさが輝くまちへ

はじめに今回のテーマに即して、地域社会の現状を共有し、その後にこれからの地域づくりをどのように行っていけばよいのかをお話したいと思います。

まず、日本の人口の推移を1950年から約100年にわたって見た「日本の将来推計人口」によると、1950年代の人口と2060年台の人口はほぼ同じ8000万人ほどになっています。しかし、人数は同じでも構成内容が大きく異なります。1950年代は高度経済成長時代で64歳以下の人口が非常に多く、それに対して2060年代は人口が減少していき、65歳以上の高齢者が非常に多くなっています。

一方で、日本では人口だけでなくもっと大きな変化が起こっています。これまでは核家族化といわれてきましたが、現在では単身化のほうが顕著です。日本の世代類型で最も多いのが単身の世代で4割。高齢者だけではなく、結婚しない若い人たちも増加していて、この傾向はこれからも続くことが予想され、家族の形が変わりつつあることを押さえておきましょう。さらに後期高齢者が全人口に占める割合が増加していくので、認知症の方の数も非常に増えていき、2060年で850万人ほどと推計されています。10人に1人が認知症の社会になるのです。ですから、いかにすれば地域の中でその人らしい暮らしを続けていくことができるか、これを真剣に考えなければならない時がきているといえます。

しかしながら日本社会をみると、家族や地域のつながりが希薄になっています。その上で、私たちにどんなことができるのかを考えてみたいと思います。現在、日本の社会福祉は「地域共生社会」に向けて動いています。厚生労働省の定義では「分野ごとの縦割りや、支え手・受け手という関係を越え、地域の多様な

コーディネーター

永田 祐
(同志社大学 社会学部
社会福祉学科 教授)



人たちがつながることで、一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともにつくっていく社会のこと」とあります。この中で「支え手と受け手という関係を越えて」ということが、一つポイントだと考えています。たとえば、高齢になるとできないことが増えていきますが、できることもたくさんあるし、多くの経験もある。そういう力を発揮してもらえ居場所と役割のある地域をつくっていかなければ、人口減少や超高齢化社会は乗り越えられません。どうすれば支援される側が支援する側にもなりうる機会や場を得られる社会になるのか、これもあわせて考えていく必要があります。

多湖 輝先生が提唱された「きょうよう」と「きょういく」という言葉があります。「きょうよう」は「今日、用がある」ということ。「きょういく」は「今日、行くところがある」ということ。地域活動では、これらが極めて重要になっていきます。ただ、サロンや健康教室に来てもらおうと思っても、困っている方はご自身からSOSを出してくだらない場合が多く、支援者とうまくつながらないことがあります。事例報告にもありますが、たとえば地域の中になじみの店などがあれば、「ちょっと気になる」とか「大丈夫かしら」という気づきがあって、民生委員やケアプラザなど専門職への相談につながっていきます。地域住民が丸抱えするのではなく、ゆるやかに見守り、行政や専門職と協力し合う。こういうプロセスが重要です。地域共生社会というのは、いいかえれば「協働という未来」なのだと思います。

“認知症について” 地域みんなで考えよう ～学びから変わる地域の穏やかなつながり～

宮上会（宮沢地区町内会）／キャラバンメイト（宮沢地区民生委員）／
二ツ橋地域ケアプラザ／瀬谷区社会福祉協議会 【瀬谷区】

山口 まず、宮沢地区について紹介します。同地区は4か所あるすべての自治会町内会館でサロン活動を行い、顔の見える関係づくりに取り組んでいます。人口9462人、世帯数4101、高齢化率26.9（令和2年9月30日時点）。宮上会は宮沢連合自治会に所属し、地区の北東部に位置しています。世帯数は325世帯です。

佐藤 宮沢地区での取組についてお話しします。きっかけは、宮沢地区にお住まいの高齢の女性Aさんの様子が「いつもと違う」と近所の方が感じたことでした。Aさんは70歳代前半でご主人と二人暮らし。3人の息子さんは、それぞれが独立しています。Aさんは宮沢に暮らして50年ほどで、美容師をしていました。ご主人は早朝から夜遅くまでの仕事です。Aさんの変化にご近所でどう対応すべきかを町内会長に相談しました。Aさんの具体的な変化としては「外出して自宅がわからなくなる」「大金が入ったお財布がなくなった」「ご主人の帰りが遅いと、近所の家を訪ねて大騒ぎをする」など。町内会長はAさんのご主人にケアプラザへの相談を勧めましたが、ご主人は言葉を濁すばかりで、そのうちに近所の方を避けるようになりました。

小島 私は近くに住んでいながら、Aさんの状態がそこまで大変になっているとは把握しておらず、地域を扱う者として苦慮したのが実態でした。

佐藤 そこで、地域包括支援センターでAさんについての情報を確認したところ、他区に住んでいる息子さんが、すでに区役所に相談して介護保険申請を行い、認知症の診断も受けていることがわかりました。すぐに地域包括支援センターから息子さんに連絡をとり、介護保険サービスの利用を提案すると同時にケアマネジャーを紹介して介護サービスが始まりました。その後、地域包括支援センターはケアマネジャーからAさんについて「デイサービスに通い始めた」「道に迷って自宅に戻れなくなったときのことを考えて、徘徊ネットワークに登録した」などの介護サービスの支援



小島 進（宮上会〔宮沢地区町内会〕会長）
橋 小末（キャラバンメイト
〔宮沢地区民生委員児童委員協議会 会長〕）
佐藤 綾子（二ツ橋地域ケアプラザ 社会福祉士）
山口 瑞生（二ツ橋地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター）
井原 柚香（瀬谷区社会福祉協議会）

状況について報告を受け、お話しできる範囲で町内会長に伝え、必要に応じて会長から地域住民へ知らせるようになりました。

また、地域住民から町内会長に寄せられる「昼夜構わず訪ねてくる」「ごみの日が覚えられない」などのAさんに関する困りごとに対しては、町内会長から地域包括支援センターに伝えられ、地域包括支援センターからはケアマネジャーに連絡し、必要な時に支援の変更をするような形をとっていました。

2か月くらい経ったキャラバンメイト連絡会での出来事です。認知症に関する話し合いのなかで、キャラバンメイトであり、地区担当の民生委員であるMさんから「近所に認知症の人がいるが、朝の5時から近所の家を訪問して困っている」との相談があり、私は「Aさんのことだ」と思い当たりました。Aさんの様子をMさんがお話しし、地域住民からは「家族と一緒に住めないのか」「施設に入ったほうがいいのではないのか」などの意見があることが伝えられました。キャラバンメイトの間に「Aさんは地域で生活するのはもう無理なのかもしれない」という空気が流れ、多少後ろ向きな発言もあったように思います。そこで、地域包

括支援センターとしては、「ご家族もできる範囲のことをしている」「ご家族としては入所も考えているが、経済的に難しい」ことなど現在のご本人や家族の状況、サービス利用状況をできる範囲で説明。さらに、キャラバンメイトの役割は、Aさんの生活に意見をすることではなく、Aさんのような人が安心して生活できるまちをつくるために、何ができるのかを考えることではないかと話したところ、場の空気が変わりました。結論としては、まず地域の方々に認知症について知ってもらえるような、認知症勉強会の開催を町内会長に提案することになりました。

井原 地区担当者は宮上会の会長と日ごろから相談や情報共有をしていたことから、勉強会の開催については、瀬谷区社協から宮上会の会長に話しました。会長は快諾され、具体的な内容に関してはキャラバンメイト連絡会で検討した上で町内会長に提案することになりました。

佐藤 認知症を学ぶにあたり、町内会長と区社協の職員で考えた勉強会の表題は「宮上会 高齢者の見守りについて～あれ、認知症かな？と思ったら～」です。プログラム内容は、まず認知症の理解と対応についての講義（認知症サポーター養成講座の講義と認知症の方への対応事例を示したDVD視聴）。次に、認知症のことを“自分ごと”と感じられるように、瀬谷区や宮沢地区の概要と高齢化率の推移についての説明を行い、最後に認知症の方をモデルにしたグループワークをキャラバンメイトがファシリテーターとなって行うこととなりました。

小島 勉強会の参加者は、Aさんの近隣の方、Aさんを支援してくれている方、認知症介護の経験者、その他の希望者です。私がチラシを持って直接声をかけ、約20名が出席しました。この会の趣旨を含めた要綱を持って一軒一軒訪ねましたが、断られた方はいませんでした。

橋 講義ではキャラバンメイトでもある、宮沢地区にある特別養護老人ホームの職員が講師を務めました。DVDを視聴したあとの地区概要の説明は、ケアプラザの生活支援コーディネーターが担当して、参加者で共有しました。次のグループワークでは、架空の事例として、認知症の症状が出始めたBさんを取りあげました。Bさんは、昼間はデイサービスに通う生活で、

ごみ捨てや買い物などのちょっとしたことができないことから、小さなトラブルが起こっている状況。参加者がBさんの近所で暮らしているとしたら、何ができるのか、どう対応するのかを考えながら話し合いました。そのとき出された意見は「困っていたら声をかける」「余裕があるときに話を聞く」「ごみ捨てのときに声かけする」など心温まる内容でした。小島会長のアドバイスで当日の座席を自由にしたこともあり、気心が知れた同士の話し合いになりました。この中で、参加者自身の家族の介護体験について話をする方が多くみられました。

佐藤 参加者へのアンケートでは、「認知症の方がいたら『何とかしなければならぬ』『注意しなければ』』と思っていたが、『一旦受け止める』だけでもよいことがわかった」「認知症について気軽に話せてよかった」「認知症についてケアプラザや区社協に相談できることがわかった」などの感想が寄せられました。勉強会後の地域でのエピソードとしては、一人で自宅に帰れなくなっている方に対して、近隣住民で協力をして家族に連絡を取り、無事に自宅まで送り届けることができた、という出来事もありました。

勉強会を開催してみて、ケアプラザとして感じていることは、地域に認知症と思われる方がいた場合、住民の方が民生委員さんを通じてケアプラザに相談してもらえるようになったこと。認知症の方に対しても、以前は「〇〇さんが認知症みたいだけど、火とか大丈夫かしら？」「施設に入った方がいいのでは」などと心配する相談が多かったのが、今では「サロンにお誘いしてみますね」などと、ほどよい距離感を保ちながらの温かい見守りに変化したように思います。また、住民同士が家族の認知症介護などについて話し合ったりできるようになったとも聞いています。ケアプラザの職員に対しても、「地域で見守りを続けている方から、こんなことを相談されたけど、どう答えたらいいかしら」と気軽に相談してもらえるようになり、自治会や民生委員をはじめとする地域の方と、ケアプラザとの距離が以前よりも近くなったように感じています。

今回のことをきっかけとして、認知症への理解を地区全体に広げ、サロン活動を活発に行うことで、住民同士のつながりを維持するとともに、住民と専門職が協力できるような体制を構築していきたいと思って

います。お互いさまで支え合うまちを目指して「できる人が できるときに できる範囲で」をモットーに、

地域づくりを進めていきたいと考えています。

質疑応答

【Q1】

永田 認知症に関する勉強会を実施する際に、Aさんの近隣の方に声をかけようと会長が思われた理由と、その時のみなさんの反応について教えてください。

小島 Aさんの見守りをしていくための議論を行う場合、ご近所で一番困っていると思われる方を必ず含めようと思いました。あとは、地域活動でリーダー的な役割を担っている女性で「この方なら手伝ってもらえそうだ」などと考えながら人選しました。お姑さんの

介護をされた方もいて、ぜひ、議論に入ってもらいたいと思いました。声をかけたみなさんは快く承諾され、この見守り活動を地域の中で広めてくださっています。

【Q2】

永田 今回、勉強会を開催して、キャラバンメイトとしてのごたえはいかがでしたか。

橘 見守りをお願いする者として、ご近所の認知症の方の話をきちんとできるようになりました。実際、認知症の方を気にかけてくださる方が多くなりました。

コーディネーター コメント comment

とてもいいと思った点が、キャラバンメイト連絡会での話し合いです。「こういう困った人がいるよ」ということから、「自分たちにできることは何か」に変化し、実際に学習する場を作りました。町内会長さんはいろいろなことを考えてメンバーを集め、学習会ではみんなで話し合う

時間を取ってほしいと要望されたそうです。これも大事なことで、ただ講義を聞くだけではなく、みんなで話してみることが大切です。当事者としての自分の経験や実際に困っていることなどを共有することで、そこから前向きな力が出てくる。これこそが地域の素晴らしさだと感じました。

実践報告

02

地域の①みまもり ②やさしさ ③こりつさせない取組 ～買い物支援にとどまらない移動販売～

都田地区平台町内会／都田地区民生委員児童委員協議会／都田地区社会福祉協議会／都田地域ケアプラザ／都筑区社会福祉協議会 【都筑区】

杉崎 都田地区は都筑区の南東部に位置し、自治会町内会は14。人口約2万2000人、世帯数約1万220世帯、高齢化率18%（令和5年9月現在）です。北部は港北ニュータウン計画により商業施設や地区センター、緑道、公園の整備がされ、西部は農業専用地も多く、住宅地、工場、商業施設が混在している地域です。

同地区では地域福祉保健計画を進めており、その中に3つの取組があります。それぞれに分科会（見守り・支え合い分科会、健康づくり分科会、こども分科会）を設置。今回、紹介する福祉訪問員による見守り活動は、見守り・支え合いの取組を充実させるために行われている活動です。



石井 清史（都田地区平台町内会 会長）
相原祐美子（都田地区民生委員児童委員協議会）
村田 幸夫（都田地区社会福祉協議会 事務局長）
小松菜hairのみやこ（都田地区見守りささえあい 宣伝部長）
松倉 英子（都田地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター）
杉崎 雅代（都筑区社会福祉協議会）

村田 都田地区では、地域福祉保健計画の見守り・支援あい分科会の啓発キャラクターとして、平成30年に「小松菜hairのみやこ」が誕生しました。本日は、みやこちゃんご本人に登場してもらいます。会場の皆さんも一緒に「みやこちゃん」と呼んでください。せーの！

会場 みやこちゃーん！

～小松菜hairのみやこちゃん登場～

村田 次に、都田地区独自の取組である福祉訪問員について説明します。福祉訪問員は地区社協が連合に依頼し、各町内から選出。民生委員と一緒に見守り活動をします。地区社協は人数の指定は行わず、世帯数に合わせて町内会が人数を決めています。福祉訪問員のフォローアップは地区社協が行い、個人情報保護の研修を受講してもらいます。また、高齢者や障害児、障害者との関わりもあるため、それぞれの特性を講演会や疑似体験をとおして学んでもらいます。福祉訪問員には規約をあえて作っていません。細かなルールがないことで、活動も柔軟になるようにしています。福祉訪問員の募集は、日ごろの活動を見て、この人はいいなと思った方に直接声をかけたり、なかには自ら手を挙げてくれる人もいます。民生委員はできないが、福祉訪問員ならできそうと思ってくれる人たちがいるのです。

松倉 地域ケアプラザと区社協の思いを紹介します。都田地域ケアプラザは令和4年に開所。当初より都田地区の地域情報や課題を区社協と共有しています。都田地区はエリアが広く、住民層や地域の課題もさまざまです。地区内を循環するバスが少なく、日常的な移動や買い物もどうしているのか疑問でした。令和5年度から試行的に運行していたバスが翌年度には廃止され、さらに移動の課題が大きくなりました。そこで、都田地区民生委員児童委員協議会の会長に相談し、日ごろから高齢者の見守りをしている民生委員たちの思いを聞いてみよう、定例会に参加しました。民生委員のみなさんに地域の困りごとや買い物の状況を尋ねると、「家族が車を出してくれる」「自分の通院のついでに」など。ではどこに行っているのかを尋ねると、意外にもバスに乗って隣接区の最寄り駅に出ている人が多いことを知りました。このときに区社協と一緒に都筑区内で移動販売を実施しているところが増えていくことをお知らせしました。民生委員のみなさんから、「まだ移動販売を呼ぶほどまでは困っていない」

「個人で困っている人はいるけど、地域ではどうだろう」という感想が聞かれました。

石井 移動販売導入経緯の前に、平台町内会の特徴を少しお話しします。平台町内会は都田地区の北西部に位置しています。世帯数は521、人口は1433人、高齢化率は11%（令和5年9月現在）です。ちなみに年少人口は22%。若いファミリー層の人口も増える一方、もとより住んでいてちょっとした困りごとを抱えた人たちが増え、次の担い手となる世代が少ないという課題があります。私は町内会長として、日ごろから困りごとの相談を受けていますが、その実態を知るために2年前から町内アンケートを実施しています。平均年齢38歳と若い町内会ですが、困りごとは世代を問わずにあることがその結果から見えてきました。そこで、生活支援ボランティアのような活動ができる仕組みを地域でつくりたいと考え、「ひらだい ホット！60」というグループの立ち上げを町内会で検討してきました。

相原 地域の困りごとを紹介します。一人暮らしのYさんは80代の女性で、在宅酸素を使用しています。ボンベを引いて元気に外出する姿を以前はよく見かけました。友人も多く、買い物は自分で選ぶというような方だと思います。見守り訪問を民生委員と福祉訪問員が分担して行っていました。去年の年末、Yさんのお宅に訪問した福祉訪問員から、「Yさんは最近外出が難しくなっているようです。誰かとおしゃべりをしたい、買い物に行きたいとおっしゃっていました」と報告を受けました。実際、このころは外出するYさんの姿は見かけなくなりましたが、地域のボランティアバスやタクシーを使ったり、息子さんの車で買い物に出かけたりするのを知っていたので、それでいいと思っていたのです。しかし、改めて福祉訪問員の話聞いて、実はもっと気軽に買い物に行きたかったのだと気づきました。同時に、前日の民生委員の定例会で紹介された移動販売の話も思い出しました。これならYさんの希望に添えるかもしれないと思い、松倉さんに詳しく聞いてみることにしました。

その時の心配は、Yさん一人のために移動販売は来てくれるのか、ということ。困っている人が他にもいればと思い、一人暮らしの方や高齢者世帯を対象に1軒ずつ訪ねて聞き取り調査を行いました。すると、訪

問した20軒のうち19軒が「あったら助かる」とのこと。結果として、地域の困りごととして見えてきたことから、石井会長に報告して「平台に移動販売を呼んでほしい」とお願いしました。

石井 町内会として移動販売を導入するためにケアプラザ、区社協、区役所の高齢・障害支援課の方々と打ち合わせをしました。次に、先行している東山田町内会“チョコ村”にみなさんと見学に行きました。そこで問題になったのは移動販売を行う“場所”です。移動販売車2台が駐車できるようなスペースの確保が難しいことに気づきました。町内でケアプラザ、区社協、区役所、販売店の方と一緒に場所探しに回り、「くりのみ公園」を候補地にしました。早速、土木事務所に公園の使用許可の申請を行いました。公共の場所である公園は子どもたちの遊び場になるため、使用状況や安全性が求められます。幸い、移動販売の時間がお昼の時間帯であることから子どもの利用は少なく、「公園がベスト」という地域の要望を土木事務所に伝え、区役所、区社協にもフォローしてもらいました。結果、公園の使用が認められたのです。

まず、ケアプラザの力を借りてチラシを作成し、町内全世帯にポスティングを実施。また、移動販売が来たことを町内全体に知らせるアナウンスの巡回ルートも作成しました。移動販売初日は、50の方が来ていただきました。日ごろから顔を合わせている方や久しぶりの方、巡回時のアナウンスを聞いて駆けつけてくれた方も。ベビーカーを押した家族や近隣に住む知的障害者の方もいらっしゃいました。

数回実施している内に、レジの会計を待っている間の荷物置き場やゆっくり話せるようなベンチ、夏にはパラソルやテントなど必要なものがいろいろ出てきました。町内会議で相談して、パイプ椅子を設置したところ、移動販売が来る前から待っている人たちが、楽しそうに話す光景が見られるようになりました。

今回、町内会として、さまざまな気づきがありました。1つ目は、想像以上に買い物に困っている人がいたこと。2つ目は継続的に利用することから、安否確認の場になるということです。集まる方の変化にも気づきやすくなり、声かけができることで、新たな困りごとにも気づくことができます。3つ目は、つながりづくりや交流の場になっていること。集まった住民同

士で近況を話したり、新しいつながりもできています。この移動販売が、見守り・支え合いの原点となる“顔の見える関係づくり”に大いに寄与していると感じています。

町内会として今後、2つの取組を考えています。1つ目は“情報”を必要な人のために常に発信していくこと。そのうえで、困っていそうな人に対して関心を持ち、積極的に声がけをしていきたいと思えます。また現在、買い物に行けない人のために代行できる仕組みや地域づくりも検討しています。2つ目は地域で行っているイベントや事業、団体と協力してサロンのような場をつくりたいと考えています。現在、月一回、ひとり住まいの高齢者に対するサロンは行っておりますが、それ以外にも気兼ねなくみんなでお昼を食べられる、そんな場を考えています。

松倉 平台町内会が移動販売をスタートしたことで、都田地区内でも関心が高まっています。町内会長や民生委員、マンションの管理組合の方が見学され、新たに移動販売を導入した町内会もあります。また、都田地区では高齢者に限らず、子どもの登下校の見守り(何かをしながら、見守りをする「ながら見守り」)にも力を入れています。都田地区は地域全体で見守り活動に取り組んでいます。

質疑応答

【Q1】

永田 福祉訪問員の位置づけと活動がめざしていることを改めて教えてください。

村田 福祉訪問員をあえて特別な人にしない、誰でもできる役割として捉え、地域住民みんなで見守りをしたいという思いで活動しています。

【Q2】

永田 民生委員として福祉訪問員の存在をどう感じていますか。

相原 仕事を分担することができること。複数の目で見るので気づきも多くなるということ。また、私の自宅は平台の西側にあつて東側に行く機会がないのですが、福祉訪問員がいろいろな場所に行ってくれるので、東側の情報も入ってくるので大変助かっています。

【Q3】

永田 移動販売をやったよかったエピソードを紹介してください。

石井 効用としては、買い物に困っている方が非常に助かっていることと、また、それが大きな楽しみになっていることに尽きるかと思います。あるグループが移動販売でお弁当をそれぞれ買い求め、楽しそうに話している場面に出会い、私が「何の集まりですか」と尋ねると、「昔、班長をやった仲間同士。今日は移動販売の日だから、ここで集まろう」と声をかけたとのことでした。以前、班長をしていた方々がこの場をサロンのように利用して、今でもこうした絆づくりをしていることに感動しました。

【Q4】

永田 みやこちゃんにお聞きしたいのですが、今後都田地区をどんな地域にしていきたいですか。

みやこ 見守り、やさしさ、孤立させない地域をめざして、地域の先頭に立って盛り上げていきます。

コーディネーター
コメント
comment

一つの課題から活動がどんどん広がっていき素晴らしい取組でした。民生委員だけでなく福祉訪問員という仕組みを独自に作り、地域でのつづやきをしっかり拾っていく。Yさんの「買い物に行けなくなってきた」という困りごとをきっかけにきちんと受け止めて解決策を考える。そのなかで調査してみたら、実は一人の課題が地域の課題だったことに気づいていきます。それに対して地域でどんな取組ができるか。もちろん地域だけではなく、ケアプラザや区社協の力も借りながら一緒につくっていきました。買い物に困っている人のために移動販売を始めたわけですが、さまざまな人が集まって旧交を温める場になったり、新しい交流が始まったり。広い意味でのサロンみたいな場所になっている。それが今後の可能性を感じられる事例でした。

分科会

1

まとめ コーディネーターからのコメント

地域福祉というのは一つの舞台みたいなものだと思います。そこにはみなさん一人ひとりが主人公として暮らしているわけです。たとえば、最初の事例では、「認知症でご近所に少し迷惑をかけている」という主人公、次の事例では「在宅酸素で買い物に行けない」と困っている方が主人公として登場しました。その方を中心に舞台が展開していくわけです。その周りにいる人たちが登場人物で、地域福祉は登場人物がたくさんいるのが特徴です。

ある方が「地域福祉は映画になるけど、施設福祉はなかなか映画にしづらい」と話していました。施設にはたくさんの方が暮らしていますが、その中の暮らしはある意味淡々としています。ところが地域福祉の現場にはいろいろな人たちが出てくるし、登場人物もどんどん変わっていくかもしれない。舞台の中には困っている人もいれば元気な人もいて、みなさんが一緒に支えあって展開していきます。それが地域福祉ではないかと思っています。

では、この地域福祉の舞台で大切なことは何かというと、今日の事例を聞いているなかで感じた3つのポイントをお話したいと思います。1つ目は、この舞台が“排除しない舞台”であること。ある人に「この舞

台から出ていってください」と言うのではなく、その人がなんとかここで頑張れるように、みんなで支えていこうという舞台なのだ、2つの事例のみなさんが教えてくれました。「認知症で困っているから施設に入ってください」とか、「在宅酸素で買い物に行けないから、もう無理じゃないか」ではなく、なんとかできないだろうかとみなさんで考えていました。

2つ目は、横浜市独自の素晴らしい仕組みです。地域のみなさんだけで困りごとを解決するのは難しいので、地域ケアプラザや地域包括支援センターなどの仕組みを利用できます。みなさんにとって、地域ケアプラザは当たり前のような存在かもしれませんが、これは横浜市独自のものです。ですから、地域ケアプラザや区社協という重要な登場人物とうまく連携・協力していくことが重要なのではないかと思います。

3つ目は、やはり舞台は楽しくないといけないと思っています。何かキャラクターを作ってみようとか、活動しているみなさん自身が楽しんでいる地域は、元気だなといつも思います。ですので、何か大変な役割を担ったとしても、深刻に抱え込むのではなく、みなさん自身が楽しみながら活動するという姿勢をぜひ大事にしていきたいと思います。

みんなが主役！

つながり 広がる まちづくり



コーディネーター

渡辺 裕一

(武蔵野大学 人間科学部
社会福祉学科 教授)

今回のテーマの趣旨の中に「地域に関わる誰もが地域の一員」という一文があります。私はこの意味がかなり狭く捉えられてはいないかと心配をしています。この文章は、地域で暮らしている人のことを指していると思われるかもしれませんが、そうではなく、「地域に関わる誰もが一員です」といっているのです。そこに会社があれば、その会社に通っている人、学校があれば、その学校に通っている学生や教師、さらに地域の境を越えて買い物に来る人もいるかもしれません。実はさまざまな人が「地域に関わっている人」なのです。

これからの“まちづくり”は住民だけではできません。住民が中心となり、地域にある福祉施設や企業も協力して一緒に考えていく。それがまちづくりに大きな力やヒントを与えてくれると考えています。それぞれが持っている強みをどのように生かせばよいのか。連携のポイントがあると思います。今回の事例を見ながら、そのポイントについてみなさんと共有したいと思います。

どうすれば、“誰もがともに安心して暮らし続けられる地域”にできるでしょうか。私は、そこに暮らす人が抱える「生活しづらい」「生きづらい」という課題を個人の責任として捉えないことが大切だと思っています。それを個人の責任にしてしまうと、地域を変えていこうというような発想は生まれてこないからです。その課題を個人と地域・環境との関係から理解して、ニーズを把握していくことが重要だと考えています。

地域・環境の課題としていくつか挙げてみましょう。たとえば買い物をする場合、スーパーマーケットがあるだけでは買い物はできません。そこまで行くために必要なアクセシビリティの課題があります。また、地域の中にある偏見や差別の課題なども、人が生きづらさを感じる原因になっています。「あなたはこういう風な行動をしないと、この地域では生きていけないよ」などと、排他的になると居心地が悪くなります。さらに、生活していく上でのサービスの向上です。周りに新しいサービスをつくれれば、困りごとは解消されるかもしれません。もう一つは、法制度の整備です。みなさんの周りがあるいろいろなルールが逆に、人の暮らしを窮屈にすることがあります。基本的にはみんなのためにつくられているはずですが、みんなの“外側”にいる人たちにとっては、そのルールが生きづらさを生む原因になることもあるのです。つまり、多様な人たちがいることに気づかないままにつくられたルールだったわけです。それに気づいたら、そのルールを変えていかなければならない。その場合、いろいろな垣根を越えて、まちと人とさまざまな組織とがつながっていくことが重要になるだろうと思います。そして、それぞれの存在が力を持っていると信じ、その力を発揮してもらうための方法を考えなければなりません。

また、認知症の方が安心して暮らし続けられるまちづくりを考えたとき、ご近所からは不安の声があがっているかもしれません。でも、ご本人は地域で暮らし続けたいと思っている。それをどうしたら実現できるのか。先ほどの地域・環境の課題と同様に、認知症の方の“生きづらさ”を解消していくような方策を見なければなりません。まず、認知症の人はこうだという決めつけなどの差別や偏見をなくす。そして、そ

の方が暮らしていくためのサービスや助けあいも必要でしょう。

誰かが排除され出て行かなければならないような地域社会は、誰もがいつかは排除される可能性のある地域社会といえます。また、そのような地域は持続可能ではありません。さまざまな状況にある人たちが、そ

れぞれの強みを生かしながら持続可能な地域社会をつくっていく。そのためにどうすればいいのか、どうやってお互いの垣根を越えて力を合わせていくことができるのか。今日はそんな課題について考えていきたいと思います。

実践報告

01

認知症やさしいまなざし あったかハートin東戸塚

東戸塚地区ハートプラン推進委員会／東戸塚地域ケアプラザ／
戸塚区社会福祉協議会 【戸塚区】

岩崎 東戸塚地区の地域概要を説明します。人口2万9154人、単位町内会数22、高齢化率22.56%（令和5年9月現在）です。東戸塚駅東側は、1980年頃から山を切り崩して開発されたマンションが多数あり、約60年前に作られた大規模な県営団地や古くからの住民の住む戸建エリアもあります。自治会がない所も多く、自治会未加入率は65%、連合町内会未加入の自治会も多い地域です。

東戸塚地区の課題としては、東戸塚駅周辺の開発が始まってから移り住んできた人が多く、また近所づき合いからある程度距離を置いて暮らしたい人など、住民同士が連携しづらい状況が挙げられます。一方で地域包括支援センターには認知症に関する相談が増加していますが、早期発見・早期対応が難しく、区やケアプラザなど支援機関の情報が地域の中で届きにくく、個人で情報を集める必要があります。それぞれのマンションや団地で活動が行われていますが、困りごとを共有し、解決に向けて検討できる場が少なく、一部の住民に負担が偏っているという課題があります。

取組のきっかけとなったのは、平成28年に生活支援体制整備事業が始まり、認知症の早期発見・見守りの体制づくりをテーマに協議体を開催したことでした。連合町内会役員や地域活動団体、ボランティア団体、金融機関や商業施設の方々が集まり、認知症の方に日ごろどのように接しているかなどのエピソードを共有しました。



金子 孝 (東戸塚地区ハートプラン推進委員会)
山田 純子 (東戸塚地区ハートプラン推進委員会)
北山 幸 (戸塚区社会福祉協議会)
岩崎 理恵 (東戸塚地域ケアプラザ
生活支援コーディネーター)
矢濱 美弥 (東戸塚地域ケアプラザ
地域活動交流コーディネーター)

山田 協議体への参加に声がかかったとき、私自身は平成9年から地域で配食サービス活動をしていて、ケアプラザには利用者への対応や地域サービスのことなどいろいろと相談にのってもらっていました。また、ケアプラザからの声かけで始まったボランティア連絡会にも参加していて、それぞれの団体がどう連携すれば地域のニーズに応えられるかを検討していました。そこにこの協議体のお話があったのです。ボランティア団体だけでなく、町内会などの地縁団体や企業、病院なども参加する集まりになると聞いて、面白くなりそうだと期待して参加しました。

岩崎 これまで集まった参加者で認知症について知識や対応方法を学んできましたが、もっと多くの人たち

に認知症について知ってもらうために、イベントを通じて広めていくことを考えたのです。そして、人が多く集まる駅前イベント「認知症やさしいまなごしあったかハートin東戸塚」を開催することになりました。同イベントでは、平成30年、31年の12月に駅周辺で、①認知症サポーター養成講座 ②声かけ見守り体験 ③情報ステーションを実施しました。当事者役は、施設の職員さんがリアルに演じ、事業所などの専門職は認知症に関する相談や見守りセンサー体験を実施。また幅広い世代に向けた認知症クイズなども行いました。そのほかにも、連合町内会や地区社協、民生委員、配食・居場所グループ、個人ボランティア、病院の方々など実行委員40名のご協力をいただきました。さらに駅やスーパー、コンビニでは、店舗内で声かけ体験を実施させていただくなど場所の提供をしてもらいました。

山田 駅の改札口周辺でアンケートの声かけをするときは、みなさんがとても好意的でした。「身近に認知症の人がいる」とか、「みんなで考えないといけないね」とか、きっかけがあれば、もっと詳しく知りたいと思っていられることがわかりました。会場で人を集めて行うよりは、駅前広場、改札周辺という人が行き交うオープンな場所で行うことで、たまたま通りすがりに足を止めた方々のきっかけにつながったと思います。東戸塚駅は生活圏として利用している人が多いので、開催中は「今日は何をやっているの?」と何人もの知り合いに声をかけられました。規模としてはちょうどよかったようです。

岩崎 コロナ禍でイベントは中止となりましたが、取組は進めようと、駅周辺の町内会、自治会、民生委員、活動団体に呼びかけて、令和2年に2回の協議体を開催することができました。各回20名ほど集まり、民生委員がかかわる認知症の方の事例について意見交換を行いました。令和3年、今後の認知症普及啓発（地域での見守り）を進めていくにあたり、地域住民の中で一緒に考えて行動してくださるメンバーを募り、「あったかハート」として具体的に取組を進めていくこととなりました。このころに金子会長は民生委員の新会長になりましたが、心境はいかがでしたか。

金子 率直に言って面倒だなというのが第一印象でしたが、私も民生委員をやる前から、町内の役員や体育

指導員などやっていて、この地域を、「みんなが住んでいてよかったなと思えるようなまちにしたい」という思いがあったので決意は固まりました。それで認知症の問題についての目標（1期・5年計画）を立て、「目標2 みんなで支え合い、助け合うまちにしよう」ということで、この中に認知症サポーター養成を盛り込むことを、みんなで話し合って決めてきました。

北山 当初はハートプラン（地域福祉保健計画）小委員会定例会の後に、あったかハートの話し合いを行う形で進めていました。定例会の盛りだくさんの話し合いの後に、あったかハートについても熱く議論が交わされました。しかし、話し合いを重ねるうちにメンバーのみなさんがわが事として考えているようになっていたので、地区別支援チーム（区役所・区社協・ケアプラザ）は、ハートプランの中で話し合うことを提案しました。コロナ禍のため大きなイベントを開催することは難しい状況でしたから、それなら地域で活動している団体へ出向こうとなり、認知症サポーター養成講座の出前講座を開催することになりました。地区民児協の定例会や地域の居場所として活動している“お茶の間楽交^{がっこう}”など、参加者の関心が高いところからスタート。また、社会を明るくする運動の推進月間に、地区で行われているミニ集会の場でも実施するなど、地域の方が集まる場を活用して進めました。

岩崎 話し合いや出前講座を続けて、メンバーからは「認知症の普及啓発は地域福祉保健計画を知らせることもつながる」「困った先の相談先として、地域ケアプラザ、民生委員、障害者施設を知ってもらう機会となる」「自治会未加入世帯に向けた啓発活動ができるといいね」という声があがりました。

山田 東戸塚には約3000戸からなる大規模マンション群があり、そのうち自治会があるのは4街区のみ。小委員会の中で、このマンション群に住んでいるメンバーから、自治会のない9つの街区約2500戸を対象を絞ってサポーター養成講座をやってみたいという意見が出ました。自治会はなくても管理組合の理事会があり、情報を伝えるルートはあるということ、そして管理組合を通じて民生委員を選出している、そのことを手がかりにできると考えたわけです。

そこで、推進委員会と民児協の連名で、各理事長宛てにお願い文を作りました。その中で、①民生委員

活動から見えていたマンション居住者の現状から、認知症についての知識や支援を必要としている住民は多いはずなので、ぜひサポーター養成講座を実施したい。

②管理組合理事会として後援をお願いしたい。③具体的には、チラシに後援：管理組合を明記することと、④全戸にポスティングする許可をいただきたいこと。

これらを書いたお願い文とチラシ原案を持って、各理事長に直接担当民生委員と民児協会長、推進委員が説明に伺い、許可をいただきました。受付開始から問い合わせが殺到し、募集定員70名に対し、最終的には80名を超える申し込みがあつてうれしい悲鳴となりました。ニーズは確かにあったのです。今回、チラシで自分の住んでいる管理組合理事会が後援していることも安心感につながったはずです。ケアプラザはまだ知名度がなく、戸塚区役所ではあまりに一般的すぎて対象が広がってしまいます。管理組合理事会なら、これは自分に向けた案内だと感じられたのではないのでしょうか。当日の会場では、これまで顔見知りではあってもあいさつ程度だった住民同士が、互いに話せる雰囲気ができたと感じます。その後、マンション自治会や地域活動団体、地域企業から講座の要請が増加し

ました。

矢濱 ケアプラザの認知度は残念ながら高いとは言えません。そこで、地域にある身近な相談窓口のPRをこの機会に行うことになり、地域ケアプラザ、民生委員、障害者施設の紹介ブースを設置。講座終了後にたくさんの方が立ち寄っていただきました。この活動がきっかけとなって、新たな相談や事業への参加などにつながることもありました。また、エリア内の自治会、学校、シニアクラブ、地域活動団体、企業などから講座の申し込みも増えました。認知症の普及啓発だけでなく、互いに見守り合うこと、つながりの大切さも広めていくことができ、地域全体での理解につながる一歩となったと思います。

金子 ここで小学校での認知症サポーター養成講座についても触れたいと思います。サポーター養成講座を進めていくときに、これまでアプローチしたことがない場所というのが私の頭の中にありました。まず、浮かんだのが小学校です。東戸塚周辺の小学校3校の校長先生へ相談し、開催が決定しました。平成28年から8年間、さまざまな取組を進めてきましたが、今後もハートプランを推進していきます。

質疑応答

【Q1】

渡辺 東戸塚地区の地域課題については、どのように把握していきまされたか。

矢濱 みなさんと話し合いを重ねるなかで、地域のよいところも課題も両方出てきました。地域包括支援センターからも個別の課題が上がってきて、その話し合いの中でみなさんに提示して共有できました。

【Q2】

渡辺 協議体の始まりが印象的でした。山田さんがそのメンバーになるときに「面白くなりそうだ」と話していましたが、その理由はなんですか。

山田 私はボランティア団体で活動してきましたが、企業や病院などと一緒に活動するのは初めてで、これまでとは違った景色が見えるのではないかとワクワクしました。

渡辺 その協議体を続けていくとき、関係機関の協力者がたくさんいらっしゃいますが、どうやって声をかけていかれたのか教えてください。

岩崎 協議体に参加して下さっていた自治会町内会、

地区社協、民生委員、また地域の活動団体などの方々と面識がある方に直接案内を出したり、スーパーやコンビニさんなどにも手分けして直談判のような形でお願いしたりしました。

渡辺 当時、コロナ禍でも「火を消さないようにしよう」と、強く思えた理由は何でしょうか。

岩崎 やはり認知症のサポーター養成講座などを実施したときに、地域の方からも「こういう機会はぜひ大事にしていきたいです」とお声をいただいたりしましたから。また、チームの中でも「なんとか話し合いだけでも続けていきたい」という声が上がっていました。

渡辺 金子さんが「東戸塚に住んでよかったと、言ってもらえるようにしたい」とおっしゃっていたことが印象的でした。この思いについて教えてください。

金子 私は生まれも育ちも東戸塚なんです。やはり自分の住んでいるところが、いいまちであってほしいというのが個人的な願望。今は民生委員をやっていますが、ハートプランの中でそれを貫かせてもらおうと思っています。

渡辺 一般的にマンションとなると、地域とのつながりが希薄になるような気がします。しかし、ここではその管理組合の理事会に目をつけられた。それはどのように思いつかれたのですか。

山田 マンションに住んでいる方は、その地域を見る機会が少ないように思います。ですから「戸塚区の区役所です」と言っても響かない。しかし、それが自分の管理組合の理事会が後援しているとなると、一気に身近に感じてもらえるのではないかと思いました。そこに、ケアプラザの名前を入れておくと、今度はケアプラザという存在も知ってもらえる。徐々に地域に目を向けてもらえるきっかけになると予想しました。

コーディネーター
コメント
comment

この事例では、垣根を越えていくための方法が使われたと思います。つまり、マンションで認知症サポーター養成講座を催して参加者を募るときの方法です。もしかしたらプライバシーをすごく大事にするという理由で、このマンションに入った方もいるかもしれない。しかし、「自分は関係ない」と垣根を作っていた住民の方々にどうすれば伝えることができるのか、つながることができるのか。そう考えたときに「あなたにとって大事なことですよ」とそれぞれの方が認識されるような働きかけだったと思います。垣根を作っていた人たちを一步前に進ませるような工夫がありました。

実践報告

02

ゆるやかな見守り「いそまる」 ～企業と地域がつながる仕組み～

第一生命保険株式会社 横浜総合支社／新杉田地域ケアプラザ／
磯子区社会福祉協議会 【磯子区】

右馬 磯子区は横浜市の東南部に位置し、JRなど3つの路線の7つの駅があり、横浜駅までのアクセスもよく、通勤等に便利なエリアです。企業が多く商店街もたくさんあります。人口は166,336人、高齢化率は27.92%（令和5年現在）です。

今回は杉田地区のお話をします。まず、きっかけとなったのは令和3年に第一生命さんから区社協に相談があったことです。「地域のために貢献したい。社員に負担なく何かできることがあるか。また、お客様も高齢化していて、訪問時に困る場面がある」というような内容で、1年かけてこの「いそまる」という磯子区社会福祉協議会見守りネットワーク事業を立ち上げました。「いそまる」は磯子と見守るを掛け合わせた言葉です。この事業は、まずは企業の社員さんによる声かけやあいさつなどの緩やかな見守りから始まります。その中で気づきや異変をキャッチした際に、区社協に相談をしてもらいます。区社協では、相談の内容によってケアプラザやいろいろな支援機関に紹介・調整をしています。それ以外にも、社員の方のスキルアップ研修や協力企業同士のネットワークづくりにも



猪股 研二（第一生命保険株式会社 横浜総合支社 営業推進グループ〔職域担当兼社会・地域結びつき推進担当〕営業部長）

市村 綾子（第一生命保険株式会社 横浜総合支社 杉田営業オフィス 生涯設計デザイナー）

右馬 彩子（磯子区社会福祉協議会）

清水 礼（新杉田地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター）

努めています。また、顧客に関する相談については、個人情報を取り扱うため、事業協定を締結しています。通勤途上や業務中での住民への緩やかな見守りについては、個人情報を取り扱わない「いそまるLite」として登録制度を設けています。

猪股 第一生命グループでは横浜市内各区でフードドライブや高齢者の見守りなどさまざまな地域貢献活動

を行ってきました。その中で、杉田営業オフィスが取り組んでいる活動について職員の市村が紹介します。

市村 杉田営業オフィスでは、磯子区にある杉田キリスト教会でのフードドライブに協力しています。具体的にはリサイクル会を出店し、オフィスで集めた食品や未使用の日用品、おもちゃなどを用意し、お菓子のつかみ取りゲームなどを催して楽しんでもらっています。ベビーカーを押すシングルマザーのお母さん、親子連れ、単身者の方など200名ほどが参加されました。

第一生命では、年に1回お客さまと対面で契約内容の確認などを行う「安心の定期点検」という作業をしています。ご本人の健康状態やご家族のこと、気になることなどを伺っていますが、その中で、70代の女性を例に挙げさせていただきます。半年ほど前から意思疎通に少し違和感を覚えていましたが、私が訪問した際、これまでの様子とは異なり、必要のないたくさんの通帳や現金、印鑑、カードなどを持ってこられたのです。この様子を見て、すぐにお子さんたちに連絡。お子さんたちは忙しい方で、近況報告などがうまくできていなかったことがわかりました。ほどなくAさんは認知症の診断を受けて、施設に入所となりました。困ったことがあったら気軽に相談できるところが必要と、「いそまる」の協定締結となった次第です。

右馬 ご相談を受けてから1年後に「いそまる」の第1号の協力事業者ということで、第一生命の杉田営業オフィスと事業協定を結びました。その後、年に2回の研修を利用していただいています。この研修では振り込め詐欺などのエリア情報を積極的に盛り込むようにしています。区社協の方にも相談が寄せられています。例えば、「道端にうずくまっている高齢者を見た時に、どうしたらいいか」とか「訪問時にお客さまが同じ話を毎回繰り返すようになり、とても気がかり」とか、「お客さまが外出するのが難しくなり、買い物頼まれるようになった」「介護保険について訊ねられる」などです。そこで、地域包括支援センターを講師に高齢者の見守りや声かけ、介護保険をテーマに研修を行うことになりました。

清水 新杉田地域ケアプラザで感じている課題は、地域行事や通いの場に出てこない引きこもりの方や、サービスや支援を拒否される認知症や独居の方などがいらして、これらは重篤化しないと表面に出てきませ

ん。ごみ屋敷やペットの多頭飼育など、近隣の住民の方から相談を持ち込まれるケースもあります。また、近年は深刻なケアマネジャー不足から介護サービスの調整ができず、状態が悪化しています。

右馬 今回、第一生命などの企業と連携したことのメリットはいかがですか。

清水 まず、第一生命の職員の方が定期的に訪問してくださることで、支援が必要な方の早期発見につながります。また、職員研修を通じて地域課題の共有もできますし、職員の方に介護保険制度やサービスの理解を深めてもらうことで、地域の見守りの目が増えます。行政や社協、ケアプラザの支援者と地域住民や商店、金融機関、企業が連携した見守りのネットワークを構築することができればと考えていますので、「いそまる」に大変期待をしています。

右馬 「いそまる」は他の企業とも連携しています。区内の動物病院からの相談で、飼い主の中には高齢化で適正飼育ができなくなる人がいて、飼育放棄に陥るケースがあります。先生からは「福祉的な課題のある飼い主への対応はとても難しい。福祉の専門家とつながり、協力を得たい」との申し出があり、令和5年に動物病院と事業協定を結びました。この中の取組をお話します。区内にある多頭飼育の課題がある世帯についての相談を受けました。まだ飼育崩壊には至っていないので、地域の方から周辺情報を得ながら、定期的に動物病院、地域ケアプラザ、区役所、区社協が集まりカンファレンスをして、緩やかに見守っていこうという方針です。また昨年、地域包括支援センターの職員を対象に「高齢者とペット問題」をテーマに、動物病院の先生に来てもらい研修をしました。「何かあったときに、どこに相談するのか、事前に何をしておけばいいのかわかった」などの声があがりました。企業と福祉が気軽に相談できる関係性がとても必要だとわかった瞬間です。また、広報活動をして協力企業を募り、今年度は地元の設備会社やタクシー会社とも事業協定を結んでいます。

「いそまる」の取組から感じたことをお話しします。私たちは日ごろから福祉関係者と話す機会が多いので、声かけや見守りなどの言葉のイメージを共有できています。しかし、企業の方とお話する場面で「見守りをお願いしたい」と話したとき、「具体的にどういうこ

とをすればいいのか、わかりにくい」と言われることが数多くありました。さまざまな人の協力を得るためには、丁寧にその背景を伝え、理解してもらうことが重要だとわかりました。もう一つは、「個」の課題と地域連携です。事業協定は締結していますが、まだ個別の課題を地域の方と一緒に連携するというようなケースには至っていません。企業の職員の方もどこまで社協に相談すべきか疑問に思っているというようなことも聞きます。

この事業をつくったときにロードマップを作りました。これから企業との連携をどのように深めていくのか、多くの企業に参加してもらうにはどうすればいいのか、今私は何をすればいいのか、定期的に確認をしながらこの事業を進めています。最終目標は、気がかりな人をみんなで気かけ合える重層的な見守りを行っていくことです。気がかりな人を真ん中にいくつもの見守りの輪が広がっていくことを願っています。

質疑応答

【Q1】

渡辺 第一生命さんが、本業があるなかでこの取組に参加できた理由を教えてください。

猪股 コロナ禍が一つのきっかけになりました。会社も営業自粛になり、社内に思いのある人がいて、社会貢献できることを何かやろうと言い始めて現場が動きました。しかし、どこに伺えばいいのかわからず、いろいろな行政窓口を訪ねたと思います。また、私どもの営業職員はほとんどが地元の人間で、地域に対する思いが強い。ボランティアなどに手を挙げる人は他の民間企業より多いと思います。

【Q2】

渡辺 会社の困りごとというものも含めて、動機づけになったわけですね。右馬さんが第一生命さんから連絡を受けて、1年ほど模索したと伺っていますが、どのように考えていたのですか。

右馬 第一生命さんからの相談は、「これをやってみませんか」とすぐに提示できそうな内容でしたが、磯子区内には多くの企業がありますから、この取組をきっかけに、区内の多くの企業とつながりたいという目論見もありました。なので、コンセプトやロードマップなどをきちんと作ってから提示しようと考えたのです。

猪股 私自身は自分が社会貢献をしているというのは、表現としておこがましいと感じています。日常の活動において少しはお役に立っているぐらいに捉えています。たまたま第一生命という形で営業職員たちがお客さまを訪問して、その様子を見ていますが、それが見守り活動の延長線上にあることで、少しは貢献できているのではないかと考えています。やはり対面でないと伝わらないものもあります。そういう文化、風土みたいなものを地域の中で継続できるような仕組みをつくっていく必要があるとつくづく感じています。

市村 私たちは生保レディで、1日の大半を地区活動に費やしているので、さまざまな場面に巡り合います。スーパーやコンビニで高齢者の方が後ろから倒れてきたりとか、交通事故の現場に遭遇したり。そんなときどうすればいいか。地域に関わる一員として、今後もこの活動に協力していきたいと思っています。

【Q3】

渡辺 これはもっと大きなチャンスになると気づいたから、企業と地域福祉がつながる仕組みをつくろうと考えたわけですね。これは重要なポイントです。また、社員向けの研修もされたそうですね。

右馬 企業にとって福祉はわからない部分がたくさんあるということで、それではまず、研修をやってみませんかとお話ししました。年に2回ですが、朝礼の折に15分ほど時間を割いてもらい、清水さんと一緒にオレオレ詐欺や地域の見守り活動などの福祉の話をしました。

【Q4】

渡辺 動物病院との関わりについてはどういういきさつですか。

右馬 動物病院のほうから、猫の適正飼育ができなくなっている高齢者の方がいると話がありました。飼い主ご本人に課題があるけど、獣医はその専門家ではないから社協に相談をしてもいいのかと。実は、磯子区社協はフードドライブをやっていて、セブンイレブンや一般の方からの寄付の中にペットフードがありました。それをその動物病院が所属している「いそねこ協議会(保護猫活動などを行っている団体)」にうちから寄付していたのがきっかけでした。

渡辺 さまざまな事業者とのお付き合いがあって、つながるチャンスがあったわけですね。

これが地域包括支援センターの方や獣医さんたちへの研修につながっていく。どんな働きかけがありましたか。

右馬 区社協の職員が、ケアプラザで行っている地域ケア会議に出席する中で、ペットを飼っている高齢者の方が入院をしたとき、そのペットの処遇についての話し合いがなされていました。実はこういった場面に遭遇することがたくさんあることに気づいて研修をすることになったのです。

渡辺 区社協やケアプラザが一方向的に相談を受けるのではなく、互いに相談できる関係をつくることができました。これからはどんな企業に可能性があると考えていますか。

右馬 たとえば、商店街の八百屋さんなどの個人商店や新聞配達の方など、地元の人に必要とされているところとつながっていきたいです。

渡辺 こういう声かけができるのも仕組みがあってこそですね。ケアプラザという立場で、地域の変化をどう感じていますか。

清水 まだ始めたばかりなので、まだ大きな変化は感じていませんが、コロナ禍でつながりがなくなった高齢者の方などがたくさんいて、そういった方とのつながりを取り戻せる取組だと感じています。そういった状況に風穴を開けるような仕組みにしていきたいと考えています。

分科会 2

まとめ コーディネーターからのコメント

今回のテーマに関して、2つの事例報告にはたくさんの示唆やヒントがありました。これらと同様とまではいなくても、参考にして自分のところでも挑戦してみよう、そういうモチベーションを高めてくれる報告でした。垣根を越えていくということでは、東戸塚地区の報告にもあったマンションへの働きかけが印象的でした。マンションのみなさん、お互いに無関係だと思っていたかもしれませんが、認知症の課題は他人事ではなく共通のもので、その案内状が自分宛だと感じられたわけです。そういうふうにならば、ちょっと垣根を越えて住民同士がつながっていけるような工夫が大事だと思いました。それから、認知症啓発のイベントを通して、地域の企業や商業施設などにつながっていくための声かけをされていました。それがきっかけとなって協力団体などが増えていく。一つの声かけが仕組みとして機能したと思います。

「いそまる」の取組も声をかけていく仕組みがありました。最初から協力してもらおうのは無理だとか、どこに声をかけていいのかわからないと諦めるのではなく、そういう機会や仕組みをどんどんつくってみる。声かけに行っただけ、協力はできないと断られることもあるでしょう。しかし、10か所行って1か所か2か所でも協力してもらえるところが出てくるかもしれない。それを信じて取り組み続ける。気づいたら協力してくれる人の数が増えていたということになるので

はないかと思っています。第一生命さんの話でも、職員の方に研修を受けてもらい、見守りの大切さを理解してもらおう。この学ぶ機会をつくることは大きなきっかけになりました。

認知症サポーター養成講座をマンションで開催された時に、70人定員に80人来たというお話がありましたが、こんないいことばかり起こるとは限りません。しかし、さまざまな地域の人たちと一緒に学ぶ機会をつくろうとしたことは、何かを起すきっかけとなり大切なことです。10人しか来なかったら、見直していく必要はありますが、2回目、3回目とやり方を変えながら繰り返して行くことが必要です。そういう地道な努力は“つながり”“広がる”ということにつながっていきます。たとえば東戸塚のマンションの取組でも、認知症の課題を通して住民の方が顔を合わせる機会が増えてきたわけですから。

仕組みをつくるのは簡単ではない。「いそまる」の企業と協定を結ぶ仕組みも1年ほど試行錯誤しながらも、最終目標を見据えたロードマップが作成されました。人と人がつながり、取組が広がるためには時間がかかります。垣根を越えるのにも労力や忍耐が必要です。しかし、みなさんの職場や地域で、「大変なことがあっても乗り越えられたらしいよ」と共有し、希望を持ちながら「みんなが主役のまちづくり」を続けてもらえればと思います。

第9回 よこはま地域福祉フォーラム



一人ひとりが大切にされるまちへ



～ 思いに寄り添い 認めあい 支えあう～

開催要綱

私たちのまち横浜では、普段の暮らしの中で様々な見守り、支えあい活動が育まれてきました。こうした活動を広く共有することで取組の輪を広げ、困りごとを受け止め、支えあえる地域をめざしていこうという思いから始まった「よこはま地域福祉フォーラム」は、今年で9回目を迎えます。

この間、住民による支えあいが着実に積み重ねられてきた一方で、一人ひとりが持つ困りごとや生きづらさ、地域における「つながり」のあり方は日々多様化しています。

そんな今だからこそ、困りごとや生きづらさだけでなく、誰しもが持つ「こうありたい」という思いや希望に寄り添うことのできる地域づくりについて、改めて振り返る機会が求められています。

本フォーラムを通して、誰もが役割や生きがいをもちながら自分らしく暮らすことの大切さを共有し、一人ひとりの暮らしや思いを大切にすることのできる地域づくりのために何ができるのか、皆さんと一緒に考えていきます。

日時
会場

令和6年**12月5日(木)** 10:15～15:45

※受付 9:45 開始

横浜関内ホール (横浜市中区住吉町4-42-1)



▲ 関内ホール アクセス

内容

「つながりの中で あたりまえに生きていく」

たんの ともふみ

丹野 智文 氏 (おれんじドア 代表)

分科会 (実践報告)

1. 寄り添い 認めあい
自分らしさが輝くまちへ

2. みんなが主役！
つながり 広がる まちづくり

開催
方法

集合型 または 後日録画配信 (You Tube)

※ 録画配信にお申込みをいただいた方には、後日メールにて資料ダウンロード、及び受講に必要なURL・パスワードをお送りいたします。

録画配信期間: 令和7年2月3日(月)～3月26日(水)

※ 視聴に関わるインターネット通信費用は、視聴される方のご負担となります。
(基調講演: 1時間30分、分科会: 各2時間30分程度)



対象

- ※ 横浜市内在住・在勤・在学の方
- ※ 市内地区社会福祉協議会、地区民生委員児童委員協議会等、地域福祉活動団体関係者の方
- ※ 社会福祉施設、地域ケアプラザ等、関係機関職員
- ※ 市・区役所職員、市・区社会福祉協議会職員等
- ※ 上記に限らず、社会福祉に関心のある方

【主催】横浜市社会福祉協議会 ・ 18区社会福祉協議会

【共催】横浜市健康福祉局 ・ 横浜市こども青少年局

つながりの中で

会場 関内ホール 大ホール

10:30~12:00

あたりまえに生きていく

おれんじドア 代表 たんの **丹野** ともふみ **智文** 氏



毎日、寝て起きること。食事をする。働くこと。遊ぶこと。
そんな「あたりまえ」の日常は、「認知症」という診断によって、
何がどのように変わるのでしょうか。そして、変わらないものとは
何でしょうか。

どんな人も、役割や生きがいを持って、自分らしく笑顔で暮らす
ことのできるまち。そんなまちをつくるためには、どのようなつながり
が必要でしょうか。

若年性認知症当事者の立場から、認知症とともに生きるというこ
とや、人と人とのつながりの中で生きていく大切さについてご講演を
いただきます。

後半はコーディネーターを交え、「その人らしい暮らしや思いに寄
り添う」ということ、「誰もが安心して認知症になれるまち」とは何か
について考えます。

【講師プロフィール】

2013年アルツハイマー型認知症と診断され、営業職から事務職に異動。
現在もネットヨタ仙台に在職しながら講演など社会的理解を広める活動をしている。
9年前、認知症当事者のための物忘れ総合相談窓口「おれんじドア」を開設。
著書に「丹野智文 笑顔で生きる」「認知症の私から見える社会」ほか。



❖ コーディネーター

宇都宮短期大学 みやわき ふみえ
人間福祉学科 教授 **宮脇 文恵** 氏

【プロフィール】

東京学芸大学教育学部卒業、日本社会事業大学大学院博士
前期課程修了。現在、宇都宮短期大学人間福祉学科教授。
専門は福祉教育論、地域福祉論。

1

寄り添い 認めあい 自分らしさが輝くまちへ

会場 関内ホール
大ホール

13:15～15:45

困りごととともに、一人ひとりの「こうありたい」という思いに地域や支援機関が寄り添う、支えあいの取組が育まれています。支える側・支えられる側の垣根なく、つながりの中で誰もが自分らしく暮らすことのできる地域づくりについて考えます。

コーディネーター： 同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授 永田 祐 氏

瀬谷区

宮上会(宮沢地区町内会)
キャラバンメイト(宮沢地区民生委員)
二ツ橋地域ケアプラザ

“認知症について” 地域みんなで考えよう

～学びから変わる地域の緩やかなつながり～

日中を一人で過ごす認知症高齢者。早朝から近隣への訪問を繰り返していたため、地域住民は関わり方に悩んでいた。町内会と関係機関は「地域で何ができるか」話し合いを重ね、学びの機会を作り始める。

“認知症高齢者が地域で暮らす”ことを町全体で考え取り組んだ事例を紐解き、地域だからこそできる緩やかなつながりについて考える。

都筑区

都田地区 平台町内会
都田地域ケアプラザ
都筑区社会福祉協議会

地域の **みまもり** **やさしさ** **こりつさせない取組**

～買い物支援にとどまらない移動販売～

一人暮らしで在宅酸素の方の困りごとをキャッチしたのは、地域独自の「福祉訪問員」。その困りごとを解決するため民生委員や町内会等とともに移動販売が始まり、単なる買い物支援にとどまらないという気づきが地域の中に広がっていった。

新たな取組をきっかけに地域が少しずつ変わっていく様子を紐解く。

2

みんなが主役！ つながり 広がる まちづくり

会場 関内ホール
小ホール

13:15～15:45

地域に関わる誰もが地域の一員です。住民、福祉施設、企業などの様々な主体が新たにつながり、ともに地域の課題に向き合うことで、まちづくりの可能性が広がります。それぞれの強みを生かした連携のポイントについて共有します。

コーディネーター： 武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授 渡辺 裕一 氏

戸塚区

東戸塚地区ハートプラン推進委員会
東戸塚地域ケアプラザ
戸塚区社会福祉協議会

認知症やさしいまなざし あったかハート in 東戸塚

認知症に関する相談が増え、見守りの体制づくりの必要性を感じていたケアプラザ。地域の様々な団体とともに啓発活動を進めることで、ゆるやかに見守りあうまちづくりを目指した住民の活動が動き出した。

自分たちでできることを模索し、仲間を増やしながら取組を進める住民の思いとは。

磯子区

第一生命保険株式会社 横浜総合支社
新杉田地域ケアプラザ
磯子区社会福祉協議会

ゆるやかな見守り「いそまる」 ～企業と地域がつながる仕組み～

企業からの「地域のために活動したい」という相談からスタートした、職務を通じたゆるやかな見守り「いそまる」。現在、保険会社、動物病院、タクシー会社、設備会社など、多様な企業が参加し、見守りの取組を行っている。

それぞれの強みを生かした福祉と多業種との協働の仕組みと、そのポイントについて考える。

お申込み

関内ホールでの参加 令和6年12月5日(木)

URL: <https://x.gd/1205chifuku>
 または下記の二次元コードよりお申込みください。



申し込みはこちら

締切 11月5日(火)

天候・災害等をやむをえず中止をする場合、本会ホームページにて、12月5日(当日)午前8時までにお知らせいたします。

プログラム

時間	内容	会場
10:15	開会	大ホール
10:30	基調講演	
12:00	休憩	
13:15	分科会1	大ホール
	分科会2	小ホール
15:45	終了	

録画配信での視聴 令和7年2月3日(月)～3月26日(水)

URL: <https://x.gd/chifuku9rokuga> 締切 3月25日(火)
 または右の二次元コードよりお申込みください。

※後日メールにて受講、および資料ダウンロードに必要なURL・パスワードをお送りいたします。

※配信期間終了の前日、3月25日(火)までにお申込みください。



申し込みはこちら

- 主催 横浜市社会福祉協議会 18区社会福祉協議会
 共催 横浜市健康福祉局 横浜市こども青少年局
 協力 神奈川県社会福祉協議会 川崎市社会福祉協議会
 相模原市社会福祉協議会 関東学院大学
 神奈川大学 鶴見大学 横浜市立大学
 (公財) 横浜YMCA
 認定NPO法人 横浜移動サービス協議会
 (公社) 神奈川県介護福祉士会
 (公社) 神奈川県社会福祉士会
 (公財) 神奈川新聞厚生文化事業団
 (公財) 横浜市男女共同参画推進協会
 (一社) 神奈川県介護支援専門員協会
 横浜市市民協働推進センター
 (一社) ラシク045 (敬称略・順不同)



会場 アクセス

- JR「関内駅」北口 徒歩6分
- 市営地下鉄「関内駅」9番出口 徒歩3分
- みなとみらい線「馬車道駅」5番出口 徒歩5分



〈個人情報の取扱いについて〉

参加申込書に記載された個人情報は、本フォーラムに係る企画、主催者用参加者名簿の作成・管理等、本フォーラム関連のみの目的で使用するとともに、本会「個人情報保護に関する方針」に基づき、適切に取り扱います。

(個人情報保護に関する方針

→<https://www.yokohamashakyo.jp/kojin-joho/>)

横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課

TEL 045-201-2090 FAX 045-201-8385

E-mail chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp

<https://www.yokohamashakyo.jp>

横浜市中区桜木町1-1 横浜市健康福祉総合センター7階

※「よこはま地域福祉フォーラム」は一部共同募金の配分金で実施しています。

※プログラム中の各表題、登壇者等は変更になる場合があります。ご了承ください。

問合せ
お申込み



主催・共催・協力団体

■ 主催

横浜市社会福祉協議会

鶴見区社会福祉協議会・神奈川区社会福祉協議会・西区社会福祉協議会
中区社会福祉協議会・南区社会福祉協議会・港南区社会福祉協議会
保土ヶ谷区社会福祉協議会・旭区社会福祉協議会・磯子区社会福祉協議会
金沢区社会福祉協議会・港北区社会福祉協議会・緑区社会福祉協議会
青葉区社会福祉協議会・都筑区社会福祉協議会・戸塚区社会福祉協議会
栄区社会福祉協議会・泉区社会福祉協議会・瀬谷区社会福祉協議会

■ 共催

横浜市健康福祉局

横浜市こども青少年局

■ 協力(順不同)

社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会

社会福祉法人 川崎市社会福祉協議会

社会福祉法人 相模原市社会福祉協議会

関東学院大学

神奈川大学

鶴見大学

横浜市立大学

公益財団法人 横浜 YMCA

認定 NPO 法人 横浜移動サービス協議会

公益社団法人 神奈川県介護福祉士会

公益社団法人 神奈川県社会福祉士会

公益財団法人 神奈川新聞厚生文化事業団

公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会

一般社団法人 神奈川県介護支援専門員協会

横浜市市民協働推進センター

一般社団法人 ラシク 045

第9回 よこはま地域福祉フォーラム

手話通訳
あり



一人ひとりが 大切にされるまちへ

～思いに寄り添い 認めあい 支えあう～

令和6年 **12月5日**(木) 10:15～15:45

後日、Youtubeでの録画配信あり

全体会

【午前】基調講演

場所

関内ホール

横浜市中区住吉町4-42-1

対象

- ・地区社会福祉協議会、民生委員・児童委員等、地域福祉活動団体
- ・ケアプラザ、社協、行政職員、福祉施設職員等
- ・社会福祉に関心のある方

申込

<https://x.gd/1205chifuku>

または右の二次元コードよりお申込みください。



締切:11月5日(火)

つながりの中で

あたりまえに生きていく



講師 おれんじドア 代表
丹野 智文 氏

2013年、アルツハイマー型認知症と診断され、営業職から事務職に異動。現在もネットトヨタ仙台に在職しながら講演など社会的理解を広める活動をしている。9年前、認知症当事者のための物忘れ総合相談窓口「おれんじドア」を開設。

コーディネーター **宮脇 文恵 氏**
(宇都宮短期大学 人間福祉学科 教授)

分科会

【午後】実践報告

寄り添い 認めあい 自分らしさが輝くまちへ

“認知症について” 地域みんなで考えよう

(瀬谷区)

1

～学びから変わる地域の緩やかなつながり～

地域の(み)まもり (や)さしさ (こ)りつさせない取組

(都筑区)

～買い物支援にとどまらない移動販売～

コーディネーター 永田 祐 氏 (同志社大学 社会学部 教授)

みんなが主役！つながり 広がる まちづくり

認知症やさしいまなざしあったかハート in 東戸塚

(戸塚区)

2

ゆるやかな見守り「いそまる」 ～企業と地域がつながる仕組み～

(磯子区)

コーディネーター 渡辺 裕一 氏 (武蔵野大学 人間科学部 教授)



ほら、
よこはまは
あったかい

主催：横浜市社会福祉協議会
18区社会福祉協議会

共催：横浜市健康福祉局
横浜市子ども青少年局

申込み
問合せ

横浜市社会福祉協議会
企画部 企画課

TEL 045-201-2090

FAX 045-201-8385

第9回 よこはま地域福祉フォーラム

一人ひとりが大切にされるまちへ ～思いに寄り添い 認めあい 支えあう～

発行日 2025年3月

発行 社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

〒231-8482 神奈川県横浜市中区桜木町1-1 横浜市健康福祉総合センター

TEL：045-201-2090 / FAX：045-201-8385

編集協力 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

制作 七七舎

「よこはま地域福祉フォーラム」は共同募金の配分金を財源の一部としています

じぶんの町を良くするしくみ。

赤い羽根共同募金

